

御堂西古墳群発掘調査報告

—庄原市板橋町・庄原カントリークラブ内所在遺跡の調査—

1984

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター

目 次

| | |
|--------------|------|
| I.はじめ | (1) |
| II.位置と環境 | (2) |
| III.調査の概要 | (4) |
| IV.造構と遺物 | (7) |
| 1. 第1号古墳 | (7) |
| 2. 第2号古墳 | (9) |
| 3. その他の造構と遺物 | (12) |
| V.まとめ | (16) |

例 言

1. 本書は庄原市板橋町における庄原カントリークラブ内の造成工事に伴い、昭和58年4月に実施した御堂西古墳群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査はリヨービ開発株式会社から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 出土遺物の整理、実測、製図、写真撮影は三枝健二が行った。
4. 本書の執筆は、主に第Ⅱ章を辻満久が、その他を三枝が執筆し、両名が編集した。
5. 第2号古墳より出土した布片の同定については、京都工芸繊維大学名誉教授布目順郎氏の御教示を得た。
6. 第2号古墳より出土した布片の拡大写真は、広島大学理学部柴田喜多郎氏の提供による。
7. 本書に掲載した第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1の地図（三次、上布野、庄原、上下）を使用したものである。
8. 本書に使用した方位はすべて磁北である。

攝 図 目 次

| | |
|------------------------------------|------|
| 第1図 位置図 (1 : 50,000) | (1) |
| 第2図 御堂西古墳群周辺地形図 (1 : 4,500) | (3) |
| 第3図 調査前地形図 (1 : 150) | (4) |
| 第4図 墳丘断面図 (1 : 60) | (5) |
| 第5図 道構配置図 (1 : 150) | (6) |
| 第6図 第1号古墳々丘実測図 (1 : 100) | (7) |
| 第7図 第1号古墳主体部実測図 (1 : 40) | (8) |
| 第8図 第1号古墳周溝出土土器実測図 (1 : 3) | (9) |
| 第9図 第2号古墳々丘実測図 (1 : 100) | (9) |
| 第10図 第2号古墳主体部実測図 (1 : 40) | (11) |
| 第11図 第2号古墳主体部出土遺物実測図 (1 : 1) | (12) |
| 第12図 土塙実測図 (1 : 40) | (13) |
| 第13図 出土遺物実測図 (1 : 3) | (14) |

表 目 次

| | |
|--------------------------|------|
| 第1表 第2号古墳主体部出土玉類計測表..... | (15) |
|--------------------------|------|

図 版 目 次

| | |
|---|---|
| 図版 1 a . 遠景 (大風呂古墳より) b . 調査前近景 (南西より) | 図版 6 a . 第2号古墳主体部鏡出土状況 b . 同上鏡除去後の布片出土状況 |
| 図版 2 a . 周溝内遺物出土状況 (南西より) b . 周溝土層断面 (第1・2号古墳間) | 図版 7 a . 第1号古墳周溝北西コーナーSK 1 及び遺物出土状況 (北より) b . SK 2 |
| 図版 3 a . 墳丘全景 (南西より) b . 同上 (南西より) | c . 第2号古墳周溝上面遺物出土状況 (南 より) |
| 図版 4 a . 第1号古墳主体部検出状況 (南よ り) b . 同上木棺痕跡 (南より) c . 同上掘方 (南より) | 図版 8 a . 第1号古墳々丘断面 (南より) b . 調査状況 (南より) |
| 図版 5 a . 第2号古墳主体部検出状況 (北よ り) b . 同上遺物出土状況 (北より) c . 同上掘方 (北より) | 図版 9 a . 調査状況 (東より) b . 御堂古墳群遠景 (御堂西古墳群より) |
| | 図版 10 a . 左…第1号古墳周溝出土蓋 右…第2号古墳周溝出土遺物 b . 第2号古墳主体部出土遺物 c . 同上布片拡大写真 |

I はじめに

御堂西古墳群の調査は庄原市板橋町における庄原カントリークラブゴルフ場内の造成事業に係るものである。当遺跡については、さきのゴルフ場造成に際して緑地帯として保存されていたものであるが、その隣部コース付近で生じた崖崩れにより通行等に危険が生じたため、これを削平し崖面を保全する事が必要とされ、事業者側も早急な記録保存の調査を望んだ。

昭和58年3月、事業者であるリヨービ開発株式会社及び(財)広島県埋蔵文化財調査センターとの間で当該予定地における発掘調査契約を交すとともに、文化庁長官宛に発掘届を提出、同年4月5日から同28日まで延べ19日間にわたり調査を実施した。調査面積は約160m²である。

なお調査にあたってはリヨービ開発株式会社、庄原市教育委員会、広島県教育委員会ならびに地元の方々から多大な御協力を受けた。関係各位に謝意を表したい。



第1図 位置図 (1:50,000)

1. 御堂西古墳群
2. 御堂古墳群
3. 大風呂古墳
4. 猪野遺跡
5. 須久母塚古墳
6. 西原古墳群
7. 犬谷古墳群
8. 石塔上古墳群
9. 寺上古墳群
10. 新庄鬼王古墳群
11. 西山遺跡
12. 小和達遺跡
13. 永宗遺跡
14. 発展古墳群
15. 千ヶ寺古墳群
16. 月貞寺古墳群

II 位 置 と 環 境

御堂西古墳群は庄原市板橋町字御堂845番地-1・849番地・850番地に所在する。

庄原盆地は吉備高原面(標高400m~600m)に形成された広義の三次盆地の一部に属し、北は中国脊梁山脈、南は神石高原と接している。当盆地の地形はさらに4つの微地形に分けられる。このうち、本古墳群は河岸段丘面(台地地帯)に立地している。

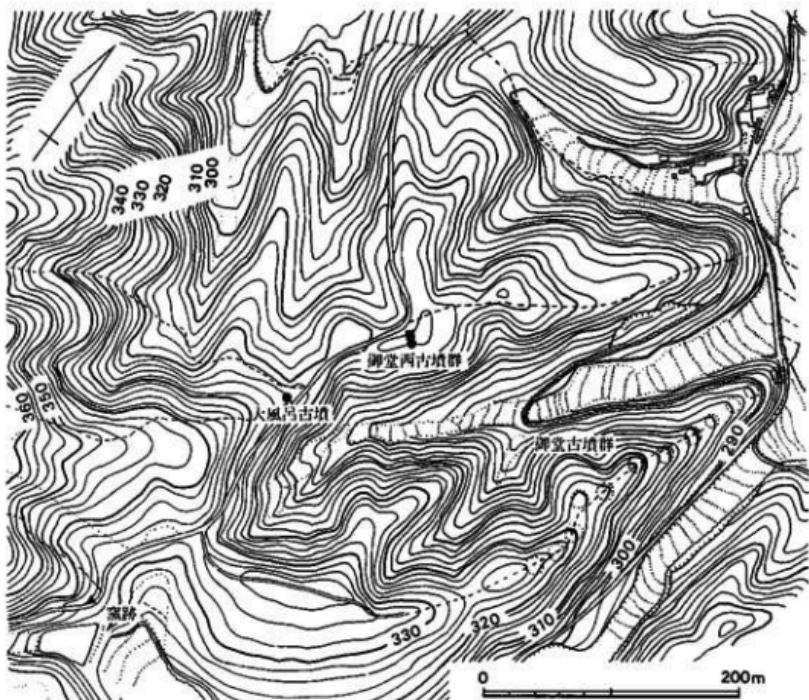
庄原市は三次市と並んで遺跡の密集している地域である。この地域の特色として、古墳時代の遺跡が他の時代に比べ圧倒的に多いことが指摘できよう。これらを時代別に概観すれば旧石器時代の遺物は僅かではあるが採集されている。小和田遺跡の槍先型尖頭器がそれである。绳文時代の遺物・遺跡は、早期の山形押型文が採集された箇瀬遺跡・大原1号遺跡で出土した中期から後期の土器片等があるにすぎない。

弥生時代になると前述の大原1号遺跡・四隅突出状の方形台状墓を検出した田尻山遺跡・後期の竪穴住居跡を検出した西山遺跡などがある。

古墳時代は遺跡の数が激増し、前時代と隔絶の感さえある。まず、集落関係の遺跡では、5から6軒の竪穴住居跡を発掘した大成遺跡、土師器が多数出土した鍬寄遺跡・熊野遺跡、13軒の住居跡及び鐵冶関係の遺構を検出した牛乗遺跡、竪穴住居跡及び掘立柱建物跡を各々3軒検出した永宗遺跡、竪穴住居跡29軒、掘立柱建物跡1軒等を発掘した境ヶ谷遺跡などがある。このように、古墳を運営した集団の様相も徐々に明らかになりつつある。

古墳は水系を1つの単位として比較的まとまりのある群を形成している。先ず、西城川流域では、前方後円墳2基を中心とする広政古墳群をはじめとして、大年古墳群・山根古墳群・寄藤古墳群・鍛錬原古墳群などがある。また市街地では全長36mの瓢山古墳(前方後円墳)、須久母塚古墳・西原古墳群・狐谷古墳群・石塔上古墳群などがある。本村川水系では、円墳31基方墳1基の計32基から成る月貞寺古墳群を筆頭に、鉄剣が出土した発展古墳群、3つの支群で構成された千ヶ寺古墳群・主体部から鉄剣が出土した大風呂古墳・御堂古墳群などがある。

古墳時代前半期に該当するものとしては瓢山古墳・旧寺古墳群・須久母塚古墳・広政古墳群などの前方後円墳を中心にもつものなどが挙げられよう。本村川流域について見ると、内部主体に土塼・粘土塼・竪穴式石室をもつ月貞寺古墳群・発展古墳群・大風呂古墳等が横穴式石室導入前の様相を示し、同一古墳群内での時間差を捨象して考えると内部主体の多様な有り方を特色としている。古墳時代後期に当るものとしては、投石古墳群・大原古墳群・篠津原古墳群等があり、また大原4号墳・国重1号墳・篠津原3号墳のように終末期に当ると思われる古墳も確認されている。



第2図 御堂西古墳群周辺地形図（1：4,500）

引用、参考文献

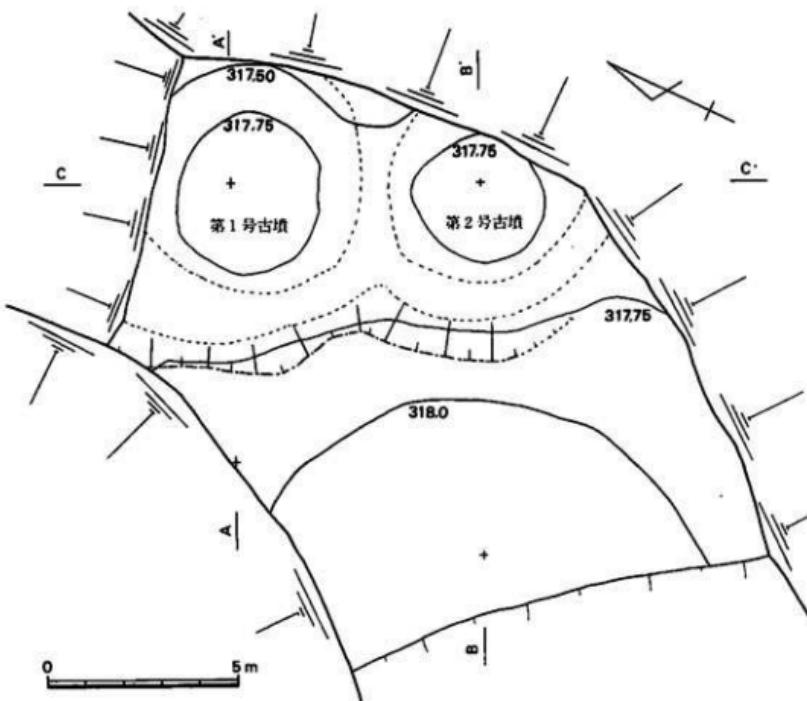
- 潮見 浩「広島県庄原市銀寄遺跡の調査」『私たちの考古学』17 昭和33（1958）年。
- 向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土器」『芸能』第2集 昭和49（1974）年。
- 広島県教育委員会「大風呂古墳発掘調査概報」昭和51（1976）年。
- 広島県教育委員会『中国縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（1） 昭和53（1978）年。
- 芸備友の会「広島県の主要古墳」 昭和54（1979）年。
- 広島県教育委員会、（財）広島県埋蔵文化財調査センター「西山・小和田・永宗一国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」 昭和57（1982）年。
- 広島県教育委員会、（財）広島県埋蔵文化財調査センター「境ヶ谷遺跡群一庄原養鶏園地造成に係る埋蔵文化財の調査一」 昭和58（1983）年。

III 調査の概要

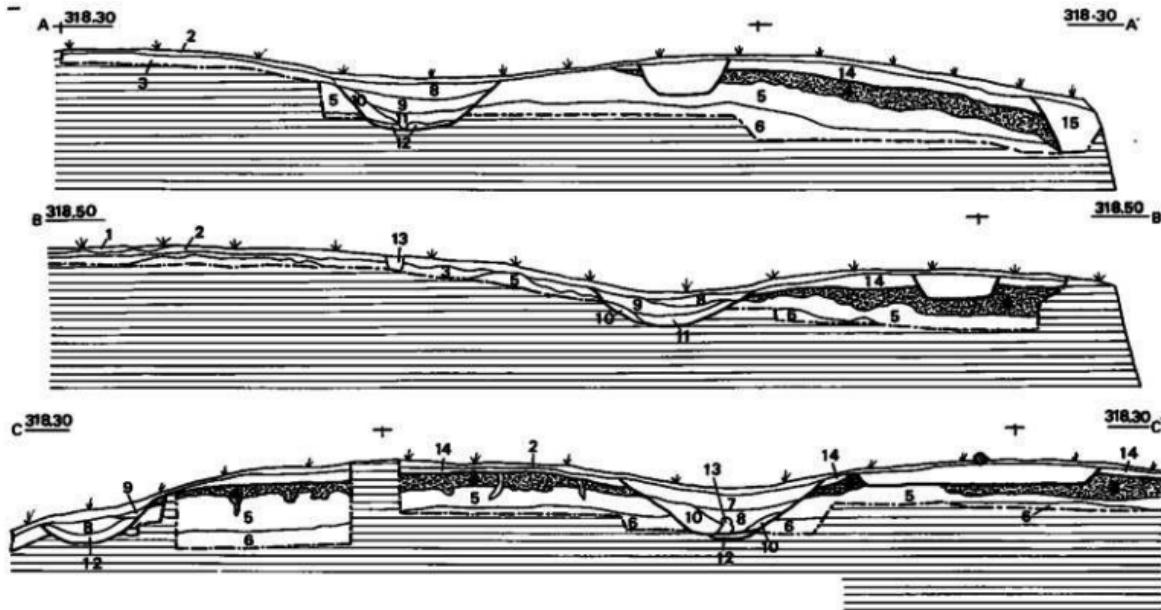
1 調査前の状況

御堂西古墳群は、背後の高丸山（標高386m）中腹から北東に派生する尾根の標高318m付近に位置する。周辺は先のゴルフ場建設のため既に造成され、当古墳群を含む約180m²が緑地帯として保存されていた。このため当古墳群東側と南北両側には、現状で比高差約6mを測る崖が迫り、墳端部もかなり削平されているものと思われた。古墳は、この東側崖面に接して北側（第1号古墳）と南側（第2号古墳）に2基確認されていた。いずれも小規模、低墳丘で、墳形等は判然としなかった。また両古墳西側には、周溝と思われる幅広の浅い窪みが観察され、その西南側には尾根稜部の平坦面が広がっていた。

2 調査の概要



第3図 調査前地形図 (1:150)

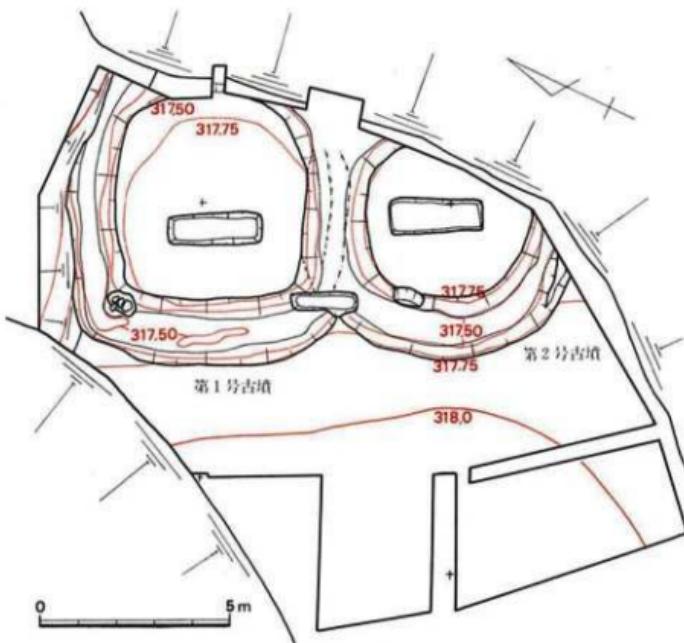


| | | |
|------------------------|-----------------|-----------------|
| 第1層 客土 | 第7層 明(黄)褐色土層 | 第13層 推進層(樹根) |
| 第2層 表土層 | 第8層 淡褐色土層 | 第14層 明赤褐色土層(盛土) |
| 第3層 くすんだ淡褐色土層 | 第9層 淡暗褐色土層 | 第15層 淡褐色土層 |
| 第4層 淡暗褐色土層(旧表土) | 第10層 淡赤褐色土層 | |
| 第5層 淡赤褐色粘質土層 | 第11層 淡明赤褐色土層 | |
| 第6層 明褐色砂質土層、硬くしまり、粘性あり | 第12層 くすんだ淡明褐色土層 | |

| | |
|--------------|-----------------|
| 第7層 明(黄)褐色土層 | 第13層 推進層(樹根) |
| 第8層 淡褐色土層 | 第14層 明赤褐色土層(盛土) |
| 第9層 淡暗褐色土層 | 第15層 淡褐色土層 |

0 2m
旧表土(4層)

第4図 填丘断面図 (1:60)



第5図 道構配置図 (1 : 150)

調査は、まず両古墳々央部に基点を設け、その延長線を基線とした。次いで双方の基点から基線に直交する線を墳丘背後に延長し、各基線に沿ってサブトレンチを設定、その壁を土層観察用畔として調査を行った。その結果第1号古墳では一辺約6mの方墳を、第2号古墳では直径5mの円墳を検出した。また周溝は3方が崖により失われているものの、残存部での遺存度は良く、覆土上層から掘込まれた土塙墓も検出した。さらに周辺への遺構の広がりを確認するため、両古墳西側の平坦部に披張区を設け、一部自然層の掘下げも行ったが、何らの遺構、遺物も検出されなかった。また、東側崖面部分は作業上の安全を期すため掘下げを断念せざるをえず、部分的な掘下げにとどめた。

3 層序

本古墳群周辺の基本的な層序は、各基線に沿った土層断面（第4図）でみれば、表土層、くすんだ淡褐色土層、淡褐色土層、淡赤褐色粘質土層、明褐色砂質土層の順を示す。更に崖面では、明褐色砂質土層下に礫層と砂層の厚い互層が観察された。

このうち旧表土層と考えられる第4層は、両古墳々丘下でのみ検出した。その堆積状況から、本古墳群は、東西に延びる尾根稜線が緩く北に方向を変え、平坦部際が緩く傾斜を始める変換線付近に築造された事が窺われる。

IV 遺構と遺物

1 第1号古墳(第6図、図版2~4)

墳丘

本墳は調査区北端の東側崖面に接して検出した。墳丘南辺は第2号古墳の周溝によって削られていたが、同溝の内側下端間で、南北5.9m、東西6.1mを測る方墳である。端正な方形は成さず、やや胴張り氣味な方形を呈している。墳丘の高さは周溝底面から西辺で約70cm、東辺で約1mを測る。盛土は西辺部付近を除いたほぼ全面に、層厚10~20cm程の厚さで遺存していた。その状況は、東西断面の西側では下面をほぼ水平に、東側では下面を旧地表の傾斜に沿って盛られていた。旧地表の遺存状況などと考えあわせると、墳丘築造にあたって西半部の自然層を削平し、平坦部を形成した後に盛土を行った事が窺われる。

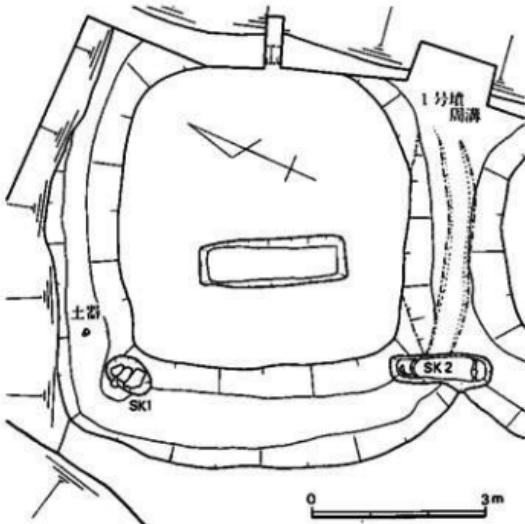
周溝

周溝は北、東辺が崖面により大きく失われていた。また南辺も第2号古墳周溝の掘下げに伴い壊されており、僅かに溝底面をとどめているにすぎなかった。最も遺存度の良い西辺でみれば、上端幅1.3m、下端幅65~95cm、深さは約50cmを測る。断面形態はU字形に近い逆台形を呈しており、その立上りは墳丘側が墳丘外方に比べ僅かに緩い立上りを示している。これに対して東辺の墳丘ラインは急な立上りを示し、その墳端も西辺溝底面より約30cm低くなっている。

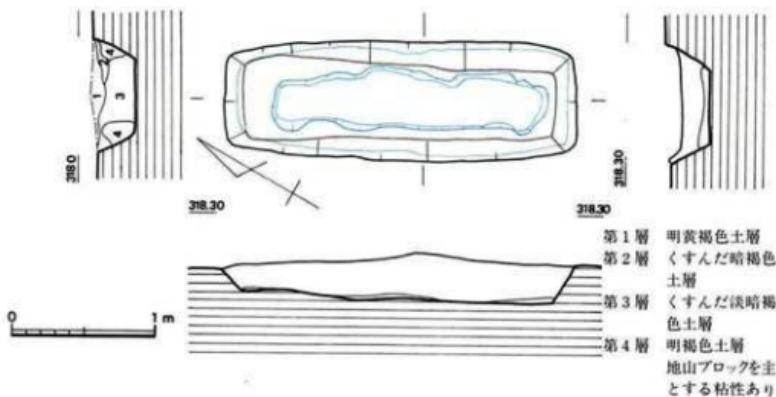
東辺部の状態については

部分的なトレンチ・拡張にとどまるが、墳丘東南コーナー手前で南辺の周溝痕跡が途切れ平坦部へと続いている。北東コーナーが失われているものの、本来墳丘の東側には周溝はらず、平坦面を作出していたものと想定される。

周溝北辺の北西コーナー寄りで、溝底面から約2cm浮いて壺形土器1点が出土した。またこのほかに、当古墳周溝底面で掘削時の工具痕跡を検出した。遺存度は悪く、西南コーナー付近



第6図 第1号古墳々丘実測図 (1:100)



第7図 第1号古墳主体部実測図（1：40）

に限られた。幅約10cm内外の直線的な痕跡で、その両端は直角に近い状況を示していた。鍔状の工具が考えられよう。

内部主体（第7図、図版4）

（掘方）

墳丘中央部からやや西に偏じて土塙墓1基を検出した。付近は先述の旧地表削平面にあたり盛土を掘込んで形成されていた。上面観は長軸2.44m、短軸83cmを測る端正な長方形を呈しており、主軸はN 30° Eを示す。立上りは直線的で、長辺で約60°、短辺で約50°前後の角度で掘込まれ、深さは最大値で40cmを測る。坂底面は長軸2.16m、短軸は南辺で45cmに対し北辺では59cmと幅広く、底面も9cm程高くなっている。

（棺構造）

塙内には掘方の立上りに沿って、地山ブロックを主体とした明褐色土層が埋込まれ、その中央部でほぼ主軸に沿って木棺痕跡を検出した。棺材自体は完全に土壤化し検出出来なかつたが、その内法は上端最大値で長軸1.9m・短軸45cmを、最小値で長軸1.8m・短軸28cmを、深さ約35cmを測る。土層断面の観察では、この地山ブロックを主とする明褐色土層は、棺材に接する面でほぼ垂直となっており、その内側には淡褐色系の土層が流入していた。これらの事から、当主体部の棺構造は、長さ約1.9m・幅30~40cm程の組合せ式木棺が想定され、底面中央にこれを安置後、掘方との間隙に地山掘削土を埋め込み状に埋込んだものと解される。棺痕跡内に流入していた淡褐色系の土層は、本来棺の上面を被覆していたものが、棺材及び人体の腐朽に伴って棺内に落ち込んだものと考えられる。北辺付近の検出面で鉄滓1点が出土したほかは、副葬品等の出土遺物はない。

また当主体部の東側には、東西3m×南北5m程の広い空間が存在している。他にも墓塙の

存在が考えられ精査したが、何らの造構・遺物も検出されなかった。

出土遺物（第8図、図版7a、10）

本古墳に伴う遺物は鉄津1、壺形土器1点である。壺形土器は推定口径7.4cm、頸部径5.7cm、胴部最大径9.8cm、器高（現存高）10.5cmを計る小型品である。色調は明るい淡黄褐色を呈し、胎土中には石英、長石などの砂粒を多く含み、概して粗い。底部には焼成後に4×4.9cm程の穿孔が施されている。破碎状況からみて、内側から施されたものと考えられるが、その破碎片は検出され

なかつた。僅かに緩く外反気味の口端部から、くびれ部にかけて徐々に器厚を増す直口の口縁部をもつ。胴部は最大径をやや上位に持ち、偏球状を呈している。器壁は風化が進むが、口頸部外面は横ナデ調整と思われ、縱方向の刷毛目痕跡が看取される。次いで胴部は刷毛目による調整で、最大径上半を縱方向の、最大径付近から下半を主に横方向の刷毛目調整を施している。刷毛目の原体幅は1.5cm前後で、条線は6～7条と粗い。内面調整は、胴部最大径下半を押圧成形後、横ナデを施し、上半部はくびれ部にかけてラフな横ナデを行う。口頸部は外面同様に丁寧な横ナデ調整を施している。また内面口頸部と胴部上半に粘土紐の接合痕跡をのこす。

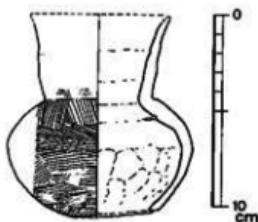
2 第2号古墳（第9図、図版2、3、5）

墳丘

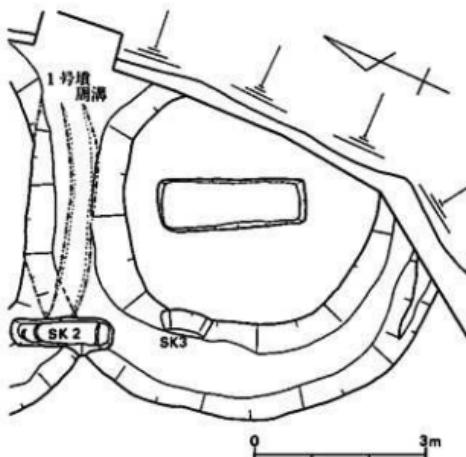
第1号古墳の南に接して、その南側墳裾と周溝を壊して築造されている。東側は崖面により、墳丘の約1/3を失っているが、周溝内側の下端間で南北5.2m、東西は推定5mを測る円墳である。墳丘の高さは溝底面から、西側で約55cm、北側では約80cmを測る。盛土は全面に認められ、層厚は10～15cm程度であった。また旧表土層も第1号古墳と近似した遺存状況を呈しており、同様な築造方法をとったものと考えられる。

周溝

東半部を崖面により失っている



第8図
第1号古墳周溝出土
土器実測図(1:3)



第9図 第2号古墳々丘実測図(1:100)

が、最大値で上端幅1.7m、下端幅90cm、深さ40~55cmを測り、南側では徐々に浅く不明瞭となっていた。断面形態は、第1号古墳と同様逆台形~U字形を呈している。周溝西側では、外方への立上りと墳丘側への立上りの傾斜も、第1号古墳と同様な傾斜を示している。また墳丘東側の状況については、両古墳周溝の重複する部分の東側で、双方の周溝が途切れ、墳丘前方（東側）に向って平坦部が確認されており、第2号古墳も東側の崖で失われた部分にかけて平坦部を作り出していたものと推定される。

内部主体（第10図、図版5）

〈掘方〉

墳丘中央部の、やや第1号古墳よりで土塙幕1基を検出した。盛土を掘込んで形成されており、上面観は長軸2.45m、短軸は北辺側で88cm、南辺側で78cmを測り、北辺で広がり気味の長方形を呈している。方軸方位はN27°Eを示す。立上りは直線的で約60°の角度で掘込まれており、深さは最大値で20cmを測る。坡底面は平坦で長軸2.25cm、短軸は北辺で80cm、南辺で64cmを測り、上面と同様なプランを呈し、北辺にかけて約4cm高くなっている。このため掘方底面は水平とはならず、北辺から南辺にかけて緩い傾斜を示している。

〈棺構造〉

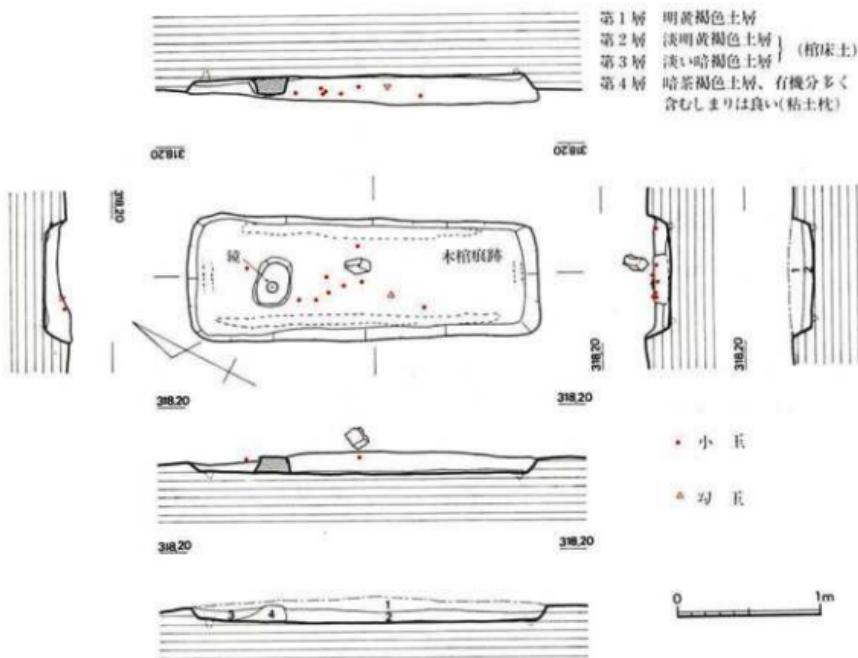
(1)

棺床土にあたる第2・3層上面で木棺の側板痕跡を検出した。木質部分は完全に土壌化しており、棺床土とほぼ同一の土層が流入していたため、平面的な痕跡を検出したにすぎない。断面観察では、側板の下端にあたる付近に櫻状の窪みがみられた。このため棺床土除去後もそのプランを精査したが、掘方底面が旧表土中にあたる事もあり不明瞭で、その平面的な検出、掘下げは出来なかった。

棺床土面で検出した木棺痕跡の状態は、西側長辺で下端のやや内側に長さ約1.95m、東辺では下端に沿って約1.65mにわたって検出した。また、短辺側では下端付近で先述の窪みを検出したのみで、棺床土面での平面的な検出は出来なかった。棺床土面での幅は5~6cm程で、深さは、先の櫻状の窪みを下端とすれば、棺床土面から10cm前後を測る。

粘土枕は中軸線上の北辺寄りで検出した。暗茶褐色を呈した有機質の粘質土層から成るもので、北辺棺痕跡内側から約30cm離れて、同じく西辺から約6cm、東辺から約15cmと、中軸線上でもやや西側に偏じて位置する。長軸は棺の主軸に直行し、長さは上端30cm、下端35cm、幅は上端21cm、下端25cmで、高さは掘方底面から約10cmを測る不整規円形を呈す。断面形態は台形となり、上面は平坦である。枕自体は掘方直上への作りつけである。このため粘土枕は、平均厚約8cmの棺床土面の上に、1~2cm程上面が出た状態であった。

以上の事から想定される棺構造は、底面に棺材をもたず、粘土枕を設置後、棺床土を被覆し、この面から側板を組んだ北頭位の組合せ式の木棺が考えられる。その法量は、内法で長軸2.05m、短軸は南辺寄りで56cm、北辺寄りで60cmを測り、掘方と同様北側でやや開き気味の長方形を呈していたものと考えられる。



第10図 第2号古墳主体部実測図（1:40）
(アミ目は粘土枕)

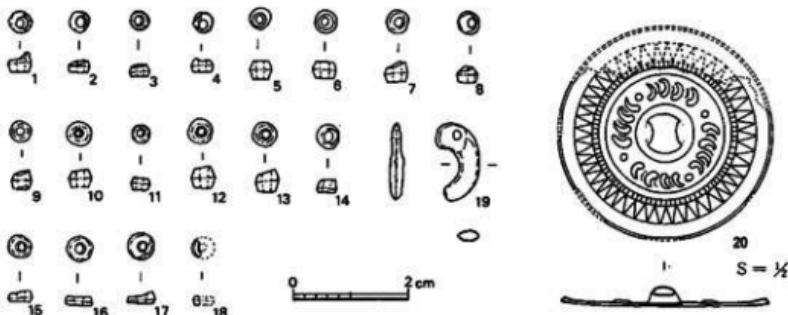
〈遺物出土状況〉

主体部の本棺内からは鏡1、小玉18、勾玉1点と布片が出土した。このうち玉類は、棺北半部を中心、南北1.25m×東西40cmの範囲で棺床土面の直上に散在していた。垂直分布では最大でも4cmの高低差しかもたず、ほぼ水平な状態を示している。また鏡は粘土枕上面の中央部で、鏡背を上に向け、鏡面を粘土枕に接して出土した。鏡面下には布片が遺存していたが、本来その布が何に用いられていたものであるのかは不明である。

また、当主体部の中央部上面には挙大程の角礫1ヶが存在する。調査前に上半部が地表に露出した状態であった。当主体部に伴ったものか否かは断定しかねる。

出土遺物（第11図、図版10）

鏡（20）は平縁の捩文鏡で、鏡面径7.4cm、縁端の厚さ2mmを計る小型品である。外区外方には銀歯文帯を、内方には直行櫛歯文帯を設け、闊線1条を廻らしている。内区には2本1組の弧線を鉗を中心として風車状に配している。弧線間の平行な条線ではなく、弧状の細線が配さ



第11図 第2号古墳主体部出土遺物実測図 (1:1, 20は1:2)

れている。4孔を配し、孔間を境に内区文様が左右対称となる。鉢は半球状を呈する有縁円座で、鋸孔幅6mm、高さ5mmを計る。推定重量は約30gである。鋳あがりのあまり良くない仿製鏡である。鋳化が著しく保存状態は悪い。

玉類は全て淡暗灰緑色を呈する所謂滑石製である。勾玉(19)は全長1.3cmの偏平な小型品である。頭部は表裏とも面取りが施され薄くなっている。内環は弧状を呈するが、外環は体部でやや間延びし、湾曲がコ状に近い状態となっている。小玉(1~18)は、最大径3.5~4mm、最大長2~3.5mm、孔径1~1.5mm、重量0.08~0.15gを計る。体部中央に稜を有す。いずれも孔のある面は概ね一方が平坦で、他の一面は斜めもしくは段をもち、切断時の痕跡を良くとどめている。穿孔は勾玉を含めすべて一方向である。

布片は鏡面と粘土枕上面とに挟まれ5.2×5.7cm程が2枚重り遺存していた。鏡面には布目の圧痕が残り、枕上の布遺存部以外のプラン内には腐蝕した纖維もしくは布目の圧痕が観察された。

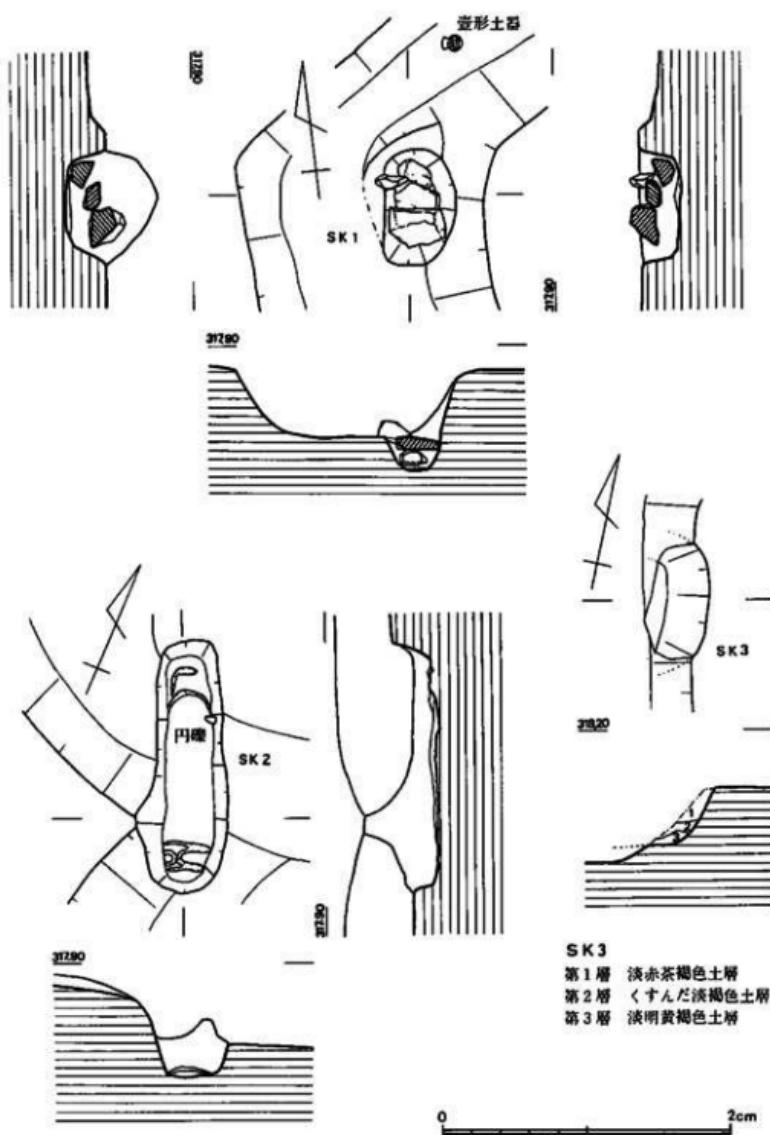
この織物の纖維は右撚で太さは経糸がやや太い傾向を示すが、共に0.5~1mm程と太く、ぱらつきを持つ。1×1cm内で経糸12本、緯糸9本と目の粗い平織である。纖維の太さなどから、その材質は大麻ではないかと思われる。また鏡背面では布纖維は観察されなかった。

3 その他の遺構と遺物

第1、2号古墳の背部周溝中からは、集石土塙を含め計3基の土塙を検出した。また周溝上～中層中からは土師質土器類の破片と黒曜石剝片が出土した。

S K 1 (第12図、図版7a)

第1号古墳周溝北西コーナー墳端部に位置する。検出面での平面形態は長楕円形を呈す。長軸71cm、短軸50cmを測り、主軸方位はN 5.5° Eを示す。塙内には底面付近に、小児頭大～人頭大の角礫4個が北から順に置かれたかの様に配されていた。塙底面と石材下面の間には、最小で2cm、最大で18cm程の間隙をもち、しまりの良い砂質土層が充満していた。土塙の深さは、東辺が第1号古墳々壙を掘込んでいるため、最大で62cmを測り、70°前後の角度でほぼ直線的



第12図 土域実測図 (1:40)

に掘込まれている。塙底面は中央部にかけて緩く傾んでおり、長軸57cm、短軸20cmを測る。副葬品などの出土遺物はない。

S K 2 (第12図、図版7 b)

第1、2号古墳の背部周溝の交わる部分に位置する。検出面での平面形態は長方形を呈し、長軸1.76m、短軸65cmを測り、主軸方位はN 23° Sを示す。第1号古墳々壠及び周溝を掘込んでいたため、土壙の深さは最大値で53cmを測り、70°前後の角度で直線的に掘込まれ、下端で明瞭な屈曲をもつ。塙底面は概ね平坦で、長軸1.56m、短軸35cmを測り、北辺部で幅30cm、長さ23~35cm、高さ5cm程の段を有す。覆土はしまりの悪い暗茶褐色系の単一の土層で、中位から小円礫1点が出土したのみである。また南辺は樹根による攪乱をうけている。

以上の事から、本土塙は北辺に作付けの枕を有した北頭位の直葬墓と考えられる。

S K 3 (第12図)

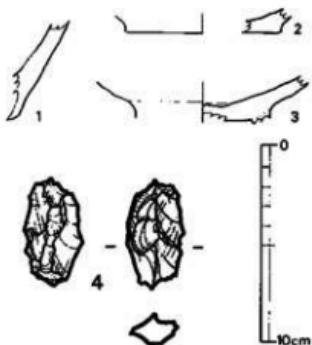
S K 2 南東の第2号古墳々壠に位置する。他の土壙と同様、同溝覆土と土塙覆土が近似していたため、第2号古墳周溝を完掘後に検出した。そのため本来の平面形態、主軸方位等は不明である。現状では第2号古墳々壠を60°程の角度で、下端付近で緩くカーブを描く様に掘込んでおり、深さは約40cmを測る。塙底面は平坦で、北端部にコーナーと思われるカーブがみられた。また本土塙西側の第2号古墳周溝上層からは、土師質土器類(第13図2、3)細片が、比較的まとまって、一定のレベルを保って出土した。出土状況から考えて、当土壙に供獻された遺物と考えられる。

以上3基とも、第1、2号古墳周溝の埋没後に掘込まれたもので、その性格はSK2のあり方等から土塙墓と考えて差しつかえないものと思われる。

塙丘、周溝上層の出土遺物(第13図、図版2 a、7 c、10)

土器

1は第2号古墳々壠部付近の表土層中から出土した底部付近の破片である。風化が進むため詳細は不明であるが、内面にはヘラ削りと思われる砂粒の動きが観察される。淡乳灰褐色を呈し、胎土中に雲母、長石、石英と黑色粒等の微細粒が含まれる。2、3はSK3付近の周溝上層から出土したもので前者は細片化している。2は底部回転糸切り痕をもつ土師質小皿で、底部推定径は約8cmを計る。淡い赤乳褐色を呈し、胎土中には1mm内外の石英、長石粒を含みやや粗い。3は高台付の土師質塊で、外面は暗灰褐色、内面は乳白色を呈し、胎土は概して良いが、石英、長石及び黑色粒などの微細粒をやや多く含む。



第13図
出土遺物実測図 (1:3、4は実大)

内外面とも回転ナデ仕上げで、方向は左廻りである。

石器

第2号古墳南西部周溝中層から黒曜石製剝片（第13図4、図版10）が1点出土した。表裏にポジティブな面をもち、腹面側には横方向の、背面側には縦方向の複数の剝離痕をとどめる。このうち背面中央の剝離痕は剝片下端でヒンジフラクチャーを生じている。楔形石器の削片などの可能性があげられよう。

以上、2・3の土師質土器類から、前述の土塙墓群は中世に下る時期の所産と考えられる。また、1及び4については、周辺からは何ら関連する遺構・遺物が検出されず、その所産年代も不明と言わざるおえない。

(註)

- (1) 棺床土は墓底長軸断面では、粘土枕の北と南で2層みられた。しかしこれは平面的には明瞭な境を持たず、単なる色調の強弱と思われる。また側板痕跡の内外と掘方立上り側とでは同一の棺床土が広がっており、裏込め状の土層は観察出来なかった。
- (2) 布目順郎氏の御教示による、なお材質等については現在調査中である。

| No. | 器種 | 法 量 (cm, g) | | | | 穿孔 | 備 考 |
|-----|----|-------------------|------|----------|------|------|----------------|
| | | 最大径 | 最大長 | 孔徑 | 重量 | | |
| 1 | 小玉 | 0.40 | 0.32 | 0.1~0.2 | 0.10 | 一方向 | 淡暗緑灰褐色原番 No. 8 |
| 2 | 小玉 | 0.40 | 0.20 | 0.15 | 0.08 | + | 原番 No. 9 |
| 3 | 小玉 | 0.35 | 0.20 | 0.15 | 0.10 | + | 原番 No. 5 |
| 4 | 小玉 | 0.35 | 0.20 | 0.15 | 0.10 | + | 原番 No. 4 |
| 5 | 小玉 | 0.40 | 0.32 | 0.15 | 0.10 | 一方向 | + |
| 6 | 小玉 | 0.40 | 0.30 | 0.15 | 0.15 | + | 原番 No. 2 |
| 7 | 小玉 | 0.40 | 0.35 | 0.15 | 0.10 | + | 原番 No. 7 |
| 8 | 小玉 | 0.40 | 0.30 | 0.15 | 0.15 | 一方向 | + |
| 9 | 小玉 | 0.40 | 0.35 | 0.15 | 0.12 | + | 原番 No. 6 |
| 10 | 小玉 | 0.40 | 0.32 | 0.1~0.15 | 0.09 | 一方向 | + |
| 11 | 小玉 | 0.35 | 0.25 | 0.1~0.15 | 0.04 | 一方向 | + |
| 12 | 小玉 | 0.40 | 0.40 | 0.1~0.15 | 0.12 | 一方向 | + |
| 13 | 小玉 | 0.40 | 0.40 | 0.1~0.2 | 0.13 | 一方向 | + |
| 14 | 小玉 | 0.40 | 0.25 | 0.1~0.15 | 0.06 | 一方向 | + |
| 15 | 小玉 | 0.40 | 0.20 | 0.1 | 0.04 | 一方向 | + |
| 16 | 小玉 | 0.40 | 0.18 | 0.2 | 0.06 | 一方向 | + |
| 17 | 小玉 | 0.45 | 0.20 | 0.2 | 0.05 | 一方向 | 淡明緑灰褐色拂土 8 |
| 18 | 小玉 | 0.40 | 0.15 | 0.2 | 0.01 | | 淡暗緑灰褐色拂土 9 |
| 19 | 勾玉 | 最大長 | 最大幅 | 最大厚 | 孔徑 | 0.20 | --方向 |
| | | 1.3 | 0.75 | 0.2 | 0.15 | | |

第1表 第2号古墳主体部出土玉類計測表

V ま と め

御堂西古墳群は前述の様に、周辺部が既に失われており、全貌の把握には至らなかったものの、その構成、墳丘ともに小規模なものであった。今回の調査では墳丘の築造法、棺構造ならびに出土遺物等において幾つかの問題が提起された。ここではこれらの問題について触れ、まとめてみたい。

位置及び立地

庄原市は中国脊梁山脈の南端に位置し、三次市と共に江ノ川水系下で盆地状地形を形成している。この盆地内には河川流域に沖積面が広がり、その周辺には低位河岸段丘面が展開している。これらの低位段丘面はさらに小河川によって樹枝状の複雑に入り組んだ小支谷を形成し、現在でもかなり深部まで開墾され、所謂「谷水田」として稻作經營の場ともなっている。

御堂西古墳群は、この低位丘陵群の内の一画に形成されている。小支谷を挟んで隣接する丘陵尾根線上に、⁽¹⁾10数基から成る御堂古墳群を始めとして、その前面に広がる低位丘陵上には千ヶ寺、月貞寺、発展など多数の古墳群が形成されている。

規模及び墳丘構造

現状では2基の古墳から成る。第1号古墳は一辺約6mの方墳、第2号古墳は直径約5mの円墳である。共に丘陵尾根線上の傾斜変換部に立地し、墳形の相異を除けば、周溝の作り方、墳丘の築造法、推定される前面のカット面（平坦部）の形成など、相互に共通点が多い。

まず、その平面形態は、あたかも周溝幕を想起させるかの様に平面的な感を強く受けるものであった。これは古墳前面が失われていたため不明な点もあるが、本来両古墳とも山側に周溝を廻らす事で面的に墳域を画し、前面に背部周溝より低い平坦部（テラス）を作り出したものと考えられる。これにより前面観では、視覚的、感覚的に見かけの墳丘を実際より誇張して表現したものと解される。ここで本来の墳丘の高さが問題となろう。両古墳とも盛土は10~30cm程しか残っていないが、第1号古墳では前面観からの見かけの墳丘高は1mを測る。双方とも盛土、主体部の遺存状況を考えれば、盛土自体はそれ程高いものでなくとも充分に墳域を表示し得たものと考えられる。

これとほぼ同様な例としては、先に調査された同一丘陵上の大風呂古墳にその姿をみると(3)が出来る。月貞寺、大鳴山、発展、田尻山などの古墳群中にも、横穴式石室導入以前の小規模、低墳丘な古墳ではしばしば、これと類似した手法が窺われる。

主体部

両古墳とも内部主体は土塙墓1基の一墳一葬である。共に盛土を掘込んで形成されている。しかし、盛土作業の過程で掘り込まれ更に上部に盛土を施したものか、墳頂から直に掘り込んだものかは、上部が既に流失しているため明らかにし得ない。

両主体部の棺構造は共に箱式木棺であるが、第1号古墳では掘方内に木棺を安置後、裏込め土を埋込み、更に上面を被覆する方法をとっている。これに対して第2号古墳主体部は、掘方内に粘土枕を設置後棺床土を敷き、この面に側板を立てた組合せ式の木棺を設置する。想定される木棺を比較すれば、第1号古墳が長さ約1.9m、幅40cm前後、第2号古墳では長さ約2m、幅60cm前後を測り、主軸方位もほぼ同一である。第2号古墳主体部掘方の頭位での開き具合から、第1号古墳も同じく北頭位と思われる。棺の法量が示す被葬者の身長から、成人を対象とした事は推定に難くない。

ここで第2号古墳の主体部についてみれば、本主体部の棺構造は箱式石棺と同様な構造が考えられるが、管見の限りでは県内に類例を見ない。また粘土枕の例としては県内では東広島市⁽⁶⁾木原向山第1号古墳、庄原市西ヶ迫第11号古墳などに、県外では山口県朝田墳墓群、岡山県弓場山古墳などに見られる。いずれも箱式石棺の棺床上に設けられたもので、横穴式石室導入以前の古墳と考えられている。このうち弓場山古墳は、礫床上に粘土枕を設定しており、枕の設置状況と棺床との関係を除けば、墓域内での位置及び、枕のプランなど類似した状況を示している。

布片について

第2号古墳主体部から出土した布片は繊維の状態から大麻と考えられ、目も粗くあまり上質な織物ではなかったものと思われる。その用途については玉類の出土状況等から考えれば、当布片は本来鏡と玉類と包んで木蓋上の頭位付近に置かれていたものとも考えられよう。県内における同時代の織物の出土は、鉄器などに鋳造し断片的に付着する例、銅鏡の鏡孔内に縦の遺存する例などに限られる。麻という材質自体は、この時代にはかなり一般的な織物であったと思われるが、遺存しにくいものだけに、当時の織物技術の一端を示す好例といえよう。

年代

本古墳群の築造年代を示すものとしては、第1号古墳の壹形土器と第2号古墳の擴文鏡がある。前者は県内では類例に乏しいが、山県郡筒賀村板迫第3号古墳、庄原市熊野遺跡などの土器群に比べ先出的である。岡山県百間川遺跡古墳時代Ⅲ期、川入遺跡大溝上層期などに近いものと思われる。後者の擴文鏡は県内では三原市馬場谷古墳群などに次いで3例目にあたる。本鏡式は仿製鏡の中でも比較的古く位置づけられている。本例の場合、内区の構成は山口県赤妻古墳の例に類似し、文様自体もより退化したものになっている。以上の事から、第1号古墳→第2号古墳の構築順を考えれば、本古墳群の築造年代は概ね4世紀末~5世紀中頃の時期編の内で把えておきたい。

古墳群の成立について

本古墳群の所在する庄原市には、東西に延びる河川流域に卓越した規模の前方後円墳が分布する。三次地域における首長墓の展開と共に、盆地地形という完結的な生産基盤を背景として一定の政治領域の形成が窺れる。このうち当古墳群の様な小規模古墳群についてみれば、庄原

市内では近年次第にその調査例が蓄積されている。先述の月貞寺、発展、大唱山、田尻山、西ヶ迫などの古墳群である。いずれも可耕地を可視範囲にもつ低位丘陵上に占地し、数基～30数基の古墳が、單一ないしは複数の支群により構成されている。これらは數m～20数mと小規模なもので、相互に接近して形成され、全体として群集する傾向を持つ。主体部は土塚墓、箱式石棺等が中心であるが、古墳群によって数及び構造にバラエティーが認められる。副葬品等の出土遺物が少い場合が多いが、築造年代は概ね5世紀～6世紀前半頃と考えられる。中には古相を示すものから、横穴式石室を持つ古墳を含む例もみられ、断続的にせよ継続して墓域を形成していた可能性も考えられる。これらの小規模古墳群中には中核的な古墳が希薄で、首長古墳及びその系列古墳群との間には質的な隔たりを示している。

御堂古墳群は比較的古式な埴丘構造を持つ例がみられ、4世紀代からの形成が考えられる。大風呂古墳は5世紀末～6世紀初頭の年代が与えられており、その立地状況等から本古墳群と共に、御堂古墳群の形成過程で分化したものと思われる。その背景には地域における農業生産基盤の単位と密接に結びつき、政治的にもより下位の支配構造を構成した地域集団が想定される。(註)

- 1) 表面観察では10mに満たない小規模で低墳丘の円墳～不整形な方墳が点在する。尾根線上でも上方の平坦部は開溝を削らす可能性が高く、斜面側では背部のカットと前面への削り出しにより墳域を形成している。後者は比較的古式な古墳に多い埴丘構造と考えられる。
- 2) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年。
- 3) 広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年。
- 4) 註2に同じ
- 5) 註2に同じ
- 6) 広島県教育委員会『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』 1975年
- 7) 広島県教育委員会、(財)広島県埋蔵文化財調査センター「西ヶ迫古墳群」 1983年
- 8) 山口県教育委員会、建設省山口工事事務所『山口県埋蔵文化財調査報告第33集』 1977年
- 9) 間壁忠彦「笠岡市走出弓場山古墳」「倉敷考古館研究集報」第8号 1973年
- 10) 脱稿後布が2枚重っている事が判明した。その用途についても多様に考えられるが断定は避けおきたい。
- 11) 広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
本例は弥生時代後期の住居跡出土のものである。
- 12) 広島県教育委員会「板迫山古墳群」「中国縦貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」
- 13) 向田裕始「庄原市上原町熊野遺跡出土の土師器」「芸備」第2集、基備友の会 1974年
- 14) 岡山県教育委員会「百間川兼基道跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」51 1982年
- 15) 岡山県教育委員会「川入遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」16 1977年
- 16) 福井万千「原史・古代編、考古編」「三原市史」第1巻通史編 1977年
- 17) 岡崎敬「日本における古鏡発見地名表」中国地方、東アジアより見た日本古代墓制研究 1977年
- 18) 樋口隆康「古鏡」新潮社 1979年他
- 19) 註18に同じ



a. 遠景（大風呂古墳より）



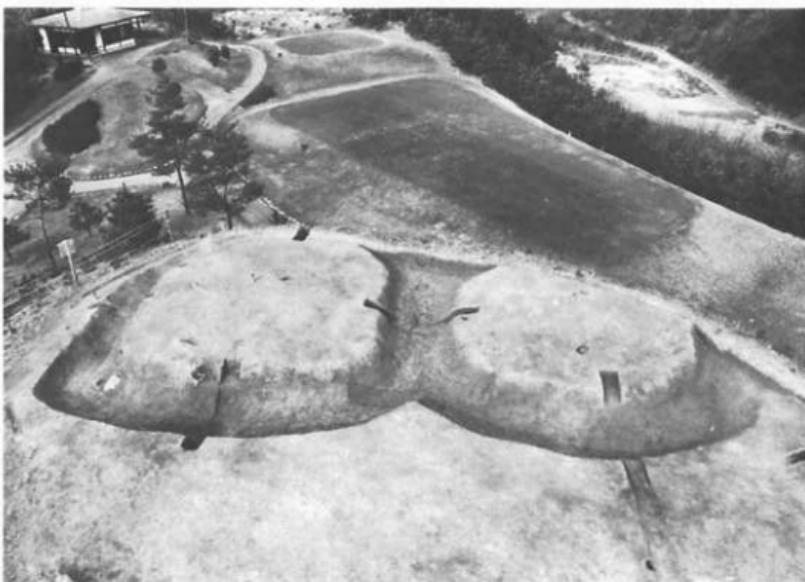
b. 調査前近景（南西より）



a. 周溝内遺物出土状況（南西より）



b. 周溝土層断面（1, 2号古墳間）



a. 塗丘全景（南西より）



b. 同上（南西より）



a. 第1号古墳主体部検出状況（南より）



b. 同上木棺痕跡



c. 同上掘方（南より）



a. 第2号古墳主体部検出状況（北より）



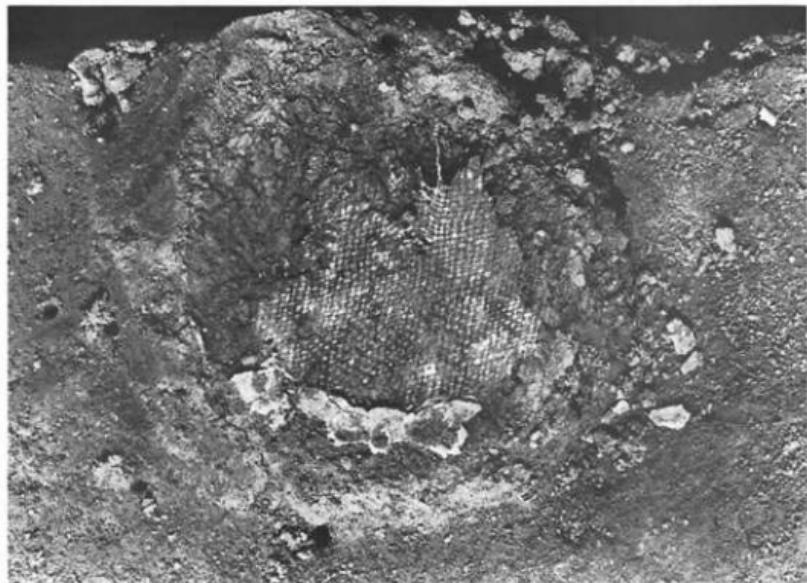
b. 同上遺物出土状況（北より）



c. 同上振方（北より）



a. 第2号古墳主体部鏡出土状況



b. 同上鏡除去後の布片出土状況



a. 第1号古墳周溝北西コーナー SK 1 及び遺物出土状況（北より）



b. SK 2



c. 第2号古墳周溝上面
遺物出土状況（南より）



a. 第1号古墳々丘断面（南より）



b. 調査状況（南より）



a. 調査状況（東より）

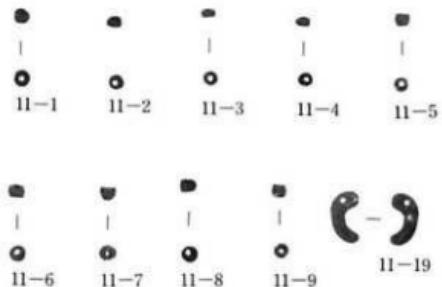


b. 御堂古墳群遠景（御堂西古墳群より）

図版10



a. 左…第1号古墳周溝出土壺、左…第2号古墳周溝出土遺物



b. 第2号古墳主体部出土遺物

約180 μ

約100 μ



c. 同上布片拡大写真 (左端の目もりは1mm)

御堂西古墳群発掘調査報告
—庄原市板橋町・庄原カントリークラブ内
所在遺跡の調査—

昭和59（1984）年3月

編集・発行 (財)広島県埋蔵文化財調査センター
印 刷 廣島中央印刷株式会社